

## 保育者が困難な出来事に出会うことについての一考察

### —松野クララの姿を中心に—

林 富公子

キーワード：保育者、困難と思える出来事、松野クララ、人間関係

#### 1. はじめに

1990年の1.57ショック以降、保育現場はそれまで以上に保育や子育てに関する政策を保育サービスという名で支えることが期待されている。また、それに伴い保育者<sup>1</sup>に求められる役割や責任は日毎多くなり、今まで以上に専門的な知識が求められるようになってきている<sup>2</sup>。

同時に、幼稚園教諭<sup>3</sup>・保育士<sup>4</sup>を問わず早期退職が問題になっており保育職に携わる者のキャリア形成が課題となっている。この問題は、1970年代頃より保育学会の発表論文集においても掲載されていた。例えば、保育者養成校の卒業生に対して職場適応に関する質問紙調査では、退職や職場を辞めたいと思っている理由は卒後1年目の者が「園内における人間関係」、「保育の仕事の煩雑さ」、それ以上勤務している者は「結婚・出産」が保育の職を辞す理由<sup>56</sup>と記されていた。

その後の保育者養成校を卒業した者に対する質問紙調査でも、「精神的・肉体的負担」、「人間関係」<sup>78</sup>、「結婚・出産」<sup>910</sup>など同様のことが述べられており、いつの時代もそれほど変わらない保育者の離職理由であると推測される。

中でも「園内の人間関係」<sup>11</sup>は勤務年数の長短に関わらず精神的健康を害する理由として考えられており、特に新任保育者は人間関係の問題を抱えやすく<sup>12</sup>、そのメンタルヘルスを考える上でも職場の人間関係が重要であるとも言われている<sup>1314</sup>。

さらに、保育者同士の人間関係だけでなく、子どもと関わって楽しいという思い、クラス運営が満足にできているという思いがあると、日々起こる様々な出来事に対しても乗り越えていこうという姿勢につながることも<sup>15</sup>も指摘されている。このように保育者として継続して仕事をする為にも「保育者同士の人間関係」や「保育者の子どもとのかかわり」は非常に重要である。

一方、個人が初めて仕事に就きそれが現実性を帯びてきた時に夢と現実のギャップを持ち<sup>16</sup>、これを切り抜けられない場合は、早期の離職に至ることがあるとも言われている<sup>17</sup>。つまり、保育者の中にはこのようなギャップを感じている間に困難と思える出来事に出会うことで「保育者同士の人間関係」や「子どもとのかかわりの楽しさ」を

得る前の段階でその職を辞している者もいると推測される。

でも、保育者がこのようなギャップを感じている中、人間関係などの困難に思える出来事に出会うことは多かれ少なかれ全ての保育者にあるのではないだろうか。

このような事を考える中で、ある一人の女性の事を考えた。その女性とは、松野クララである。彼女はドイツ人でドイツの保母養成所で保育を学んだと言われる女性であり、日本で初めて根付いた東京女子師範学校附属幼稚園の最初の主任保母である。さらに彼女は主任保母当時に妊娠も出産もしている。彼女の末裔であるニコラス・フォン・ハインツ氏が述べているようにクララはドイツから離れた遠い地で自分の将来を探し求めたこと<sup>18</sup>は、おそらく困難に感じる出来事の連続であったと思われる。

そこで今回は、保育者養成に携わる者の一人として松野クララが困難な出来事に出会った時にどのように向き合っていくのかという事についてみることを目的とする。

## 2. 東京女子師範学校附属幼稚園の成立

まず、東京女子師範学校附属幼稚園の成立について述べる。

保育原理のテキストなどでは、幼稚園の創設期について「1876（明治9）年に、東京女子師範学校に附設して幼稚園が創設されたのが、我が国の幼児保育施設の始まりであるとされています」<sup>19</sup>と述べられており、東京女子師範学校附属幼稚園が日本において初めて根付いた幼稚園であることはよく知られている。

一方で、東京女子師範学校附属幼稚園以前にも幾つかの幼稚園が存在していたことも周知の事実である。例えば、明治4年横浜の「亜米利加婦人教授所」、明治8年京都の柳池学区の「幼穉遊嬉場」の存在がある。しかし、これらの施設は国民一般の教育に対する関心が低いこと、幼児教育に対する理解と協力が得られなかったこと、幼児そのものを集めることが難しかったことという理由で、いずれも2年とたたずに閉園している<sup>20</sup>。

このような中、東京女子師範学校附属幼稚園が現在のお茶の水女子大附属幼稚園につながる程長い間続いている理由は、官立であったことがしばしば言われる。

しかし、官立の幼稚園であったもののその設立過程には紆余曲折があり、容易に設立されたものでない。例えば、「明治5年の學制の中には幼児教育に対する文言が見られるが、その内容は幼稚小学の存在を示した一文が掲げられているだけで、その運営に関して、何らの指針を示されておらず、基本的になんらその普及を企図されるものではなかった<sup>21</sup>」とあるように、当初幼稚園はその存在がそれ程大きく期待されていなかったと思える節もある。

また、文部大輔の田中不二麿が東京女子師範学校設立以前の明治8年7月に三條大臣宛に「幼稚園解説之儀の伺い」を出したが、8月2日に「伺之趣難聞届候事」が下り

たので、再度同 8 月に太政官に宛てて「再應伺」申し出、ようやく伺いを出した 2 ヶ月後の 9 月 13 日に三條大臣の「伺之趣難聞届候事」という達しが出て、早速 9 月 15 日に幼稚園設置を布達したこと<sup>22</sup>からも、幼稚園の創設が望まれつつもその過程においては困難を伴った事柄があったことが窺える。

このように日本で初めての幼稚園の設立が複雑な様相を見せる中において東京女子師範学校に幼稚園が設立された理由のもっとも直接的な原因は、明治 7 年田中不二麿の名で、三條大臣に出た伺書の中で「蓋シ女子ノ性質婉靜音ニ能ク其教科ヲ講習スルヲ得ルノミナラズ、向來幼穉ヲ扶養スル任アレバナリ」<sup>23</sup>とあることや、皇后陛下も文部大輔田中不二麿を宮中に召されて「女學ハ幼穉教育ノ基礎ニシテ忽略ス可カラザル者ナリ」<sup>24</sup>とあることから、東京女子師範学校の設立にある<sup>25</sup>とされている。

こうして日本で初めての幼稚園と言われる、東京女子師範学校附属幼稚園は東京女子師範学校の付属として設立された。これは、東京女子師範学校の開成式から約 1 年後の明治 9 年 11 月のことである。

そして明治 9 年 11 月 16 日、東京女子師範学校は 75 人の子どもたちを迎えてスタートした。その時に同附属幼稚園の保姆<sup>26</sup>として採用されたのが、主席保姆の松野クララ<sup>27</sup>、保姆の豊田英雄、近藤濱、助手山田某、大塚某<sup>28</sup>である。

## 2. クララが東京女子師範学校附属幼稚園主席保姆 になるまで

松野クララ（クララ・ツィーテルマン Clara Zitelmann）<sup>29</sup>は、保育用語辞典第 8 版によると、「東京女子師範学校附属幼稚園創設当時の主任保姆<sup>30</sup>であり、我が国における幼稚園教育の基礎を築いた先覚者」<sup>31</sup>とあるように、1853 年 8 月 2 日にドイツのベルリンで生まれた女性で保育を学んだものにとっては非常に有名な人物である。

ベルリン生まれの彼女が日本の幼稚園の主席保姆になった理由はドイツ留学中の日本人男子である松野礪<sup>32</sup>と知り合って婚約したことにある。

クララは松野との婚約後、明治 9 年 7 月 2 日にフランスのマルセイユから郵船タイナス号で日本へ向かい、同年 8 月 14 日に横浜港へ到着した。このようにクララが日本に来た理由は松野との結婚の為であったが、書類不備の為すぐには結婚ができなかった。この問題に対する解決の為かクララと松野礪は 8 月 15 日には出会えなかった木戸孝允と、16 日に独逸公使館で会いこの件に関する話し合いをしている<sup>33</sup>。

その場でクララは涙ながらに松野と婚姻するまで、公使館の男子の中に一人泊まることも、松野と同居することもできないことを訴えた。そしてその姿に木戸孝允は深く同情し<sup>34</sup>、クララの英語が堪能であったことから、彼女は木戸孝允邸の敷地内に住み、明治 9 年 9 月 26 日より木戸を雇主としながら東京女子師範学校で英語の教師を始め<sup>35</sup>、その後、明治 9 年 11 月 16 日に東京女子師範学校附属幼稚園の主席保姆に転職した<sup>36</sup>。

この転職に関して、8月に来日し、婚姻も難航する中でクララがわずか3ヶ月足らずで、フレーベル式の保育法の教師資格を持っていることが分かり、日本で最初に根付いた幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園の主席保母として採用されたことは、タイミングが良すぎるので、あらかじめ来日前にそのような話ができていた可能性のあったことが指摘されている<sup>37,38</sup>。

筆者もクララは来日前から日本に来た後は東京女子師範学校附属幼稚園の保母として働く予定があったのではないかと考えている。というのも幼稚園の園舎ですら「幼稚園解説の伺いを立てて、その再應伺には、建物に特別な費用を出してもらわないでよいからと、ひたすら許可の出るような伺いが出ているが、出来上がった建物や庭園などを考えてみると、間に合わせのものでも無いような、相当立派な建築であり、特に幼稚園のために作られた内部である（下線筆者）」<sup>39</sup>と記載されていることから、園舎にもこだわりを持って建築しているにもかかわらず、偶然保育者を見つけたとするのは不自然であると感じるからである。

クララの学んだ養成校や期間などまだ解明されていないことは多くあるが、いずれにせよ、クララ・ツィーテルマンは日本の幼稚園で保母 をすることを念頭において来日したと推察される。

### 3. 東京女子師範学校附属幼稚園開業とクララ

クララの来日の理由は幼稚園保母 になることではなく、松野礪との結婚を目的としたものであった。だから、クララは幼稚園開園後の明治9年12月17日に松野礪と東京上野の精養軒において日本で初めて公然とした国際結婚をし<sup>40</sup>、その後明治10年10月12日に一人娘のフリーダ・文を出産<sup>41</sup>した。つまり明治9年8月に来日したクララは日本での生活と結婚生活をスタートさせつつ、日本初の幼稚園で主任保母になり、その中で出産をするという多くの私生活における変化を経験している。

ところで、クララは東京師範学校附属幼稚園の主席保母として採用になったが、同園は開園当初から問題を抱えていた。

というのも東京女子師範学校附属幼稚園は、その規模からしてとても大きく、世界的に見ても珍しい幼稚園であったことが言われており<sup>42</sup>、少なくとも同僚の保母 たちよりは幼稚園と言うものを知っているクララにとっても、東京女子師範学校は未知のものであった ことがその述べられている<sup>43</sup>。

その結果、東京女子師範学校附属幼稚園は彼女が態勢を整えるためにも開園わずか10日で子どもの入園を当分さしとめたこと<sup>44</sup>や、東京女子師範学校の学生ら数人も学業の合間に手伝いに行っていたこと<sup>45</sup>も言われており、開園当初は混沌とした日々の連続であったことと思われる。

林：保育者が困難な出来事に出会うことについての一考察

またクララの幼稚園の仕事には、クララが英文を読み幼稚園監事の関信三が通訳と解説をして、同僚の保姆らが筆記するという形で行われていた<sup>46</sup>保育法の伝習<sup>47</sup>があった。日本語が苦手でコミュニケーションも難しく<sup>48</sup>、さらに同僚ではあるが先生と生徒との立場でもあったクララの同僚保姆らとの関係は、どのようなものであったのだろうか。

幼稚園開園当初の保姆の年齢は数えて、主席保姆松野クララ 24 歳、保姆豊田英雄 32 歳、保姆近藤濱 37 歳であり、他の同僚たちに比べ年齢がとても若く、人生経験も未熟な女性であった。そのようなこともあってか、豊田の目録におけるクララの呼称が「クララ先生」、「独逸人教師」、「クララ氏」と変化しており、クララと 2 人との関係にも監事であり通訳であった関信三のフォローが必要であった可能性があることも指摘されている<sup>49</sup>。このことから、豊田も近藤も礼節をもってクララに接してはいたものの、3 人の間には少し心理的な距離があるように感じられた。

一方で、クララは幼稚園での主席保姆の仕事以外に妊娠期間中の明治 10 年 8 月に 4 泊 5 日の日程で群馬県へ出向き、前橋と高崎において、県内の指導層を対象に、幼稚園設置の必要性を訴える仕事もしている<sup>50</sup>。現在においても妊婦の長距離移動はリスクが伴うことが言われており<sup>51</sup>、クララは、妊娠 8 ヶ月の体で、今以上に交通手段が限られるなか<sup>52</sup>、体調に気遣いながらもこの仕事を行ったことが推測される。

さらにクララは、保育に関する仕事以外にも、明治 10 年頃週に 2、3 回自宅で 8、9 歳の巖谷小波に独逸語を教え<sup>53</sup>、年代の詳細は不明だが幼稚園主任保姆時代に学習院女子部でピアノを教えていた<sup>54</sup>。このようにクララは幼稚園での業務以外にも多様な仕事を行っていた。

クララは来日後まだそう日数が立っていない中、言葉、結婚に際する法律上の問題、日本のしきたり、不慣れた天候<sup>55</sup>、結婚、妊娠、出産を私生活で経験し、仕事では見たこともないような規模の幼稚園の主任保姆になり、さらに幼稚園以外の多様な仕事にも取り組んでいた。

これらのことから、クララ自身も私生活、言語、様々な仕事、同僚との関係などから心身ともに気苦労が絶えなかったことが予想できる。

このような困難に思える出来事にクララは直面しつつ、なぜそれらの事柄を遂行することができたのであろうか。その理由として彼女の信仰による社会性と人類愛、事にあたっての強い信念と周到な心構えにより、精神的ないし物理的な重圧をはねのけていたことが後のクララの姿から考察されている<sup>56</sup>。これらのことから、クララの開園当時にあった私生活も含めた難問に直面しつつも、乗り越えていこうとする芯の強さが窺われた。

#### 4. クララと子どもたちとの関わり

クララは日本語が不自由だったことや私生活上の変化もあってか、子どもたちと一緒に恩物の活動をしたり、触れ合ったりすることは少なかったと言われている<sup>57</sup>。そのような中、クララの東京女子師範学校付属幼稚園での主な仕事は週に2回（月曜日と水曜日）の朝の集まりで遊戯をする際にピアノを弾くこと<sup>58</sup>であったという<sup>59</sup>。このようなことから、クララ自身は東京女子師範学校付属幼稚園の主席保母であったにもかかわらず、実質的な保育は同僚の豊田英雄や近藤浜らが担っていたとされている<sup>60</sup>。

クララの第一印象は少年期の巖谷小波が「高い鼻とちょっと怖いような目つきを持っていた」<sup>61</sup>と述べているように、一見すると少し怖い印象を与えていた。しかし、性格はいたって優しく親切<sup>62</sup>で大変陽気<sup>63</sup>であったと言われている。

一方、明治12年頃に園児であった宮田修の記憶として「先生は独逸の婦人で松のクララという方で、この方が主として幼児の面倒を見ておられました。クララ先生の他に尚保母の方が二人居られましたが、お名前は忘れてしまいました」<sup>64</sup>というものがあ

る。この時の二人の保母とは明治12年2月19日に豊田英雄が鹿児島県初の幼稚園の設立により同県に出張していた為、明治11年12月24日に東京女子師範学校付属幼稚園の保母として採用された横川楳子<sup>65</sup>と以前から勤めていた近藤浜であったと考えられる。なぜクララはあまり保育に携わっていなかったと言われているにもかかわらず、他の保母たちよりも子どもの印象に残っているのだろうか。

その理由の一つは先ほどの元園児の「先生は独逸人の婦人で」（下線筆者）という発言にもあるように外国人だったからだろう。しかし、それだけで続きの「この方が主として幼児の面倒を見ておられました」（下線筆者）というように、主として関わっていたとは言わないのではないだろうか。

幼稚園におけるクララと子どもとの関わりにおいては、同僚であった豊田英雄が最晩年に当時の事を振り返って「クララは記憶力がよく娘を出産した後、娘を幼稚園に連れてきて子どもたちと一緒に日本語で手をたたきながら唱歌を歌っていた」と述べており<sup>66</sup>、単に幼稚園でピアノを弾いていただけではないことが分かる。

この文章だけではクララが子どもと一緒に日本語で唱歌を歌っていた時期を特定することは難しい。しかし、クララと英雄と一緒に勤務した時代であったこと、英雄が「娘を出産した後」（筆者下線）と述べていることから、クララが娘文を出産した後の明治10年10月から英雄の鹿児島出向の明治12年2月までと考えるのが妥当ではないかと思われる。

さらに、クララの子どもに対する関わりとして当時師範学校の保母見習いであった氏原銀が「子どもに対してはやはり英語を使って居られましたので言葉はよくわかり

ませんでした。先生のご様子でお心持を知ったり、先生も動作によって子どもの心をくみ取っておいでのことは度々ありました」とあり、その後、幼稚園での保育中の子どもとの関わりを述べている<sup>67</sup>。

氏原は明治11年2月に上京後、授業の一環で毎日附属幼稚園の保育に参加し妊娠の為同年8月末に大阪に帰っている。これは明治11年2～8月にかけての出来事であったことが分かる。

これら2つの話から、単純にクララはピアノだけを弾きに来ていたわけではなく、子ども好きであった事<sup>68</sup>もあり、日本語に苦勞をしながらも子どもと関わろうとしていたのではないと思われる。そしてその姿が園児にも伝わり前述したような「この方が主に幼児の面倒を見ておられました」という文言に繋がってきたことが推測された。

## 5. おわりに

松野クララについては、日本の保育に大きな影響を及ぼした人物である割によく分かっていないことが多い。しかし、クララは言葉や文化が異なる国で保育者として、今まで見たこともないような大規模の幼稚園の立ち上げに主席保母と言う名で参加し、多様な仕事を果たしたことは事実である。そして、その生活は毎日が困難に感じる出来事の連続であったと容易に予想できる。そのような中であっても、日本語で歌を歌い、ピアノを弾く中で、子どもたちとかかわるといように子ども達とも積極的に接した様子が窺えた。

同僚保育者との関係も監事関信三のフォローが必要であったことも確かである。しかし、関信三はあまり体調がすぐれず幼稚園を休む日もあり<sup>69</sup>、また、明治12年11月5日に病死している<sup>70</sup>ため、幼稚園に就業している間ずっと関信三だけに支えてもらっていたわけではないだろう。晩年豊田英雄はクララがドイツに帰国する時にどこまでかは忘れたが送っていったこと、帰国後消息は分からないがどうされているのかと気に留め述べており<sup>71</sup>、このことからクララと同僚との間には同じ困難な時代を乗り越えたという絆があったのかもしれない。

フレーベル主義保育の初期の定着のためには、田中篤胤、中村正直、桑田親吾の支援を受けた関信三、松野クララ、豊田英雄、近藤濱のチームが必要であったこと<sup>72</sup>が言われている。日本で初めて幼稚園を立ち上げるという難しい出来事を遂行するために、クララも含めてそれぞれが自分の与えられたことに取り組んだことが推測される。

今回は、松野クララの姿から彼女がどのようにその困難に向き合っていたのかという事について考えた。クララは今ほど情報が行きかかわなかった時代に、独逸から日本へひとりでやって来たほど、気丈で信念を持った女性であったことは確かである。

しかし、同時に彼女の日本語ができなくても日本語での遊戯などに入っていくその姿勢、子どもに対する温かいまなざしは子どもとの関係に変化をもたらしていたことも事実であったと思われるし、物事に真摯に向き合う姿勢が同僚保母らとの関係にも良い影響を与えたのではないだろうか。

クララの姿から、保育者が困難であると思われる出来事に出会った時に、年齢も国籍も関係なく保育者同士も互いの違いを認め合いながら相手を尊重しつつ支えあって物事と向き合う事の重要性、つまり「寛容性」の涵養<sup>73</sup>の必要性についても改めて考えさせられた。

## 〈注〉

<sup>1</sup> 保育者とは保育用語辞典（2015 保育用語辞典第8版 ミネルヴァ書房）では、①広義（幼稚園教諭、保育所保育しに限らず、親もすべての幼稚園や保育所のスタッフも含有することば）と狭義（幼稚園や保育所で直接的に子どもの保育に携わるものについての、そうした共通の働きに着目したことば）の意味があると書かれている。しかし、続いて①保育するものとしての働きに着目したことばであること、教師とは違い、配慮をもって、専心にかかわる人であることが書かれている。これらのことから、本文では保育者を幼稚園、保育所、認定子ども園で直接子どもの保育に関わる者と定義する。

<sup>2</sup> 保育所保育指針解書の(4)保育士の専門性において、保育士の専門性が述べられている。

([http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/hoiku04/pdf/hoiku04b\\_0001.pdf](http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/hoiku04/pdf/hoiku04b_0001.pdf) 2016/3/9 アクセス) また、幼稚園教諭の専門性についても、「幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教員のために」(報告)の中でその必要性が記されている。

([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.htm) 2016/3/9 アクセス)

<sup>3</sup> 川俣美砂子 2010 幼稚園教諭のキャリア形成に関する研究—養成課程の現状と課題 福岡女子短大紀要 (73) p46

<sup>4</sup> 庭野晃子 2015 新任保育者の早期離職に関する調査Ⅱ—東海地区における調査結果報告—静岡県立大学短期大学部研究紀要 29-W 号 p1

<sup>5</sup> 光岡摂子・石井美晴・常田奈津子・後藤千鶴子 1974 保育者の資質に関する研究—保育科卒業後1年における保育者としての意識—日本保育学会大会研究発表論文集 (27), p169-170

<sup>6</sup> 田中東亜子 1975 短大卒業生の保育者としての定着性について 日本保育学会大会研究論文集 (28) p125-126

<sup>7</sup> 高見令英・桐原宏行・徳田克己・横山範子・横山さつき 1994 保育従事者の職場適応に関する研究(1)—職種間比較を中心として—日本保育学会大会研究論文集 47(318)

<sup>8</sup> 望月珠美 石上智美 徳田克己 横山範子 2001 保育者養成校の卒業生における職場適応 III : 保育者の離職・転職の状況を中心に : 2000年の調査結果より 日本保育学会大会研究論文集 (54) p 810-811,

<sup>9</sup> 原田康子 1995 保育者養成短期大学における、卒業生の就職動向と退職の要因(その2): 保育職を退職した者の退職理由と結婚退職の慣例の有無 日本保育学会大会研究論文集 48(205)

<sup>10</sup> 石上智美 望月珠美 徳田克己 横山範子 2001 保育者養成校の卒業生における職場適応 II : 保育従事者の職場における楽しみと困難を中心に : 2000年の調査結果より 日本保育学会大会研究論文集 (54), p 808-809,

<sup>11</sup> 西坂小百合 岩立京子 2004 幼稚園教師のストレスと精神的健康に及ぼすハーディネス, ソーシャルサポート, コーピング・スタイルの影響 東京学芸大学紀要, 第1部門, 教育科学 Vol. 55 p. 141-149

<sup>12</sup> 中田奈月 (2003) 女性保育者のライフコース 奈良女子大学社会学論集, 10, p103-125.



- <sup>13</sup> 加藤由美・安藤美華代 (2013) 新任保育者の抱える困難一語りの質的検討— 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 教育実践学論集, 14, p27-38.
- <sup>14</sup> この「保育者の人間関係」に関しては、新任保育者だけでなく、職場の上司や同僚からの支え（ソーシャル・サポート）があると心身への影響が緩和されると述べられており（重田博正 2010 保育職場のストレス 保育職場のストレス—いきいきした保育をしたい! (保育と子育て 21) かもがわ出版 p36)、全ての年代において当てはまるのではないかと考えられる。
- <sup>15</sup> 前田富公子 2003 保育者の精神健康に関する一考察 聖和大学修士論文 p11
- <sup>16</sup> これを表す言葉として、リアリティ・ショックというものがある。リアリティショックとは、その仕事が学校でどんなに入念に説明されても、また、どれほど多くのパートタイムないし見習いの仕事を経験してきても、人は一方における自分の期待・夢と他方における職場での仕事・そこに所属することが実際にどのようなものかのギャップに初めて出会うので、職場との最初の全面的なかかわりの現実には衝撃的であるというものである。
- Schein, E. H. , 1991, キャリア・ダイナミクス—キャリアとは、生涯を通しての人間の生き方・表現である 二村敏子・三善勝代訳, 白桃書房 p105 (Schein, E. H. , 1978, Career Dynamics: matching individual and organizational needs, Boston : Addison-Wesley Publishing Company).
- <sup>17</sup> 谷川夏実 2015 初期キャリアの保育者の危機と専門的成長に関する研究動向 教師学研究 16 p13
- <sup>18</sup> 宮里暁美 立浪澄子 小林恵子 編集 2011 松野クララを偲んで—顕彰碑設立の記録— 松野クララ顕彰碑建設事務局発行 p21
- <sup>19</sup> 森上史郎編 2007 保育原理第2版 ミネルヴァ書房 p164
- <sup>20</sup> 古木弘造 1996 幼児保育史 大空社 p8, 9
- <sup>21</sup> 日本保育学会 1968 日本幼児保育史第一巻 p52
- <sup>22</sup> 倉橋惣三 新庄よし子 1930 日本幼稚園史 フレーベル館 p32, 33
- <sup>23</sup> 倉橋惣三ら 1930 前掲書 p7
- <sup>24</sup> 倉橋惣三ら 1930 前掲書 p7
- <sup>25</sup> 倉橋惣三ら 1930 前掲書 p6
- <sup>26</sup> 1947年「学校教育法」の制定により幼稚園教諭の名称が「保姆」から「教諭」と改められたことから、ここではあえて「保姆」ではなく「保姆」と記している。
- <sup>27</sup> この時点でクララはまだ松野礪と結婚しておらず、正式にはクララ・ツィーテルマンであるが、引用文献であることから松野クララと表記した。
- <sup>28</sup> 倉橋惣三ら 1976 前掲書 p66
- <sup>29</sup> クララの綴りは、誤植の影響等からか“Clara Titelman”、“Klra Zeitelmann”、“Klara Titelman”など様々なものがあるが、中村理平が「洋楽導入の軌跡—日本近代洋楽史序説—」(1993 刀水書房 p227)でも述べているように、ドイツ領事館員が自国民のクララ・ツィーテルマンの結婚について書いた公文書ではその綴りが“Clara Zitelmann”となっており、これが正式な綴りとしてみなしても良いとしている。
- <sup>30</sup> ここでは松野クララの職名が「主任保姆」となっているが、これは現在の読者のことを考えてこのように表記されていると考えられる。
- <sup>31</sup> 永田陽子 2015 保育用語辞典第8版 ミネルヴァ書房 p430
- <sup>32</sup> 松野礪とは、松野クララ顕彰碑建設事務局発行 (宮里暁美ら編集 2011 前掲書 p4) の書籍の中の彼の碑の写真を見ると「松野礪先生は弘化四年長州美祢郡太田の生まれ。明治三年北白川宮の随員としてドイツへ渡り、高等森林学校で林学を学ぶ。八年に帰国し内務省に迎えられ初の林業行政に迎えられ、初の林業技術者として林業行政に携わるが技術者養成の必要性を痛感し、林業試験研究の端緒となる樹木試験場を創設。さらに東京大学林学科の前身である山林学校を設立。初代校長として人材育成に貢献した。山林局の要職を歴任後、三十八年目黒に設立された林業試験場の初代場長となる。明治四十一年五月四日歿 享年六十一歳」と記されており、現在の山口県出身の男性で日本の林業の発展に貢献した人物であることが分かる。
- <sup>33</sup> 妻木忠太 1933 木戸孝允日記 第3 木戸侯爵家蔵版 p399-400 早川良吉 近代デジタルライブラリ <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1075415> (2016/3/9 アクセス)

- <sup>34</sup> 木戸孝允日記 1933 前掲書 p400
- <sup>35</sup> 中村理平 1993 前掲書 p203
- <sup>36</sup> 前村晃 野里房代 清水陽子 高橋清賀子 2010 豊田英雄と草創期の幼稚園教育 建帛社 p125
- <sup>37</sup> 中村理平 1993 前掲書 p204
- <sup>38</sup> 例えば文部少輔の田中不二麿が、幼稚園解説が認められた後、明治9年4月から明治10年1月までフィラデルフィア万国博覧会に出席するため渡米し、幼稚園開業時にも不在だったにもかかわらず、後年「ついにその開設を断行し、而して彼の幼稚園の誕生国たる独逸人にして、当時すでに松野礪夫人となりシクララ子を主任教師に任ぜり」と述べており、田中が当初からクララが来日した暁には指導者として迎える手はずを整えたうえで幼稚園解説の伺いを出したと考えられることや、クララも、礪との婚約後礪の希望通りに幼稚園教師としての卒業試験を受けたことを述べており、来日後は幼稚園教育を伝授する役割を自覚していた節もあったことが記されている（立浪澄子 2012 保育者の誕生 - 東京女子師範学校初代主任保姆松野クララ来日の経緯について - 幼児の教育 111 p64）
- <sup>39</sup> 倉橋惣三ら 1930 前掲書 p55
- <sup>40</sup> 木戸孝允日記 前掲書 p464
- <sup>41</sup> 小林富士雄 2010 松野はごまと松野クララ—明治のロマン 大空社 p156
- <sup>42</sup> 国吉栄 2005 日本幼稚園史序説 関信三と近代日本の黎明 新読書社 p215
- <sup>43</sup> 国吉栄 2005 前掲書 p287
- <sup>44</sup> 国吉栄 2005 前掲書 p288
- <sup>45</sup> このことから、保姆たちだけでは保育をすることが難しく人手が足らなかったことが推測される。山川菊枝 1972 おんな二代の記 平凡社東洋文庫 p34
- <sup>46</sup> 前村晃ら 2010 前掲書 p126
- <sup>47</sup> 幼稚園開業前の11月16日から始められ、幼稚園開業後には幼稚園の放課後行われていた。
- <sup>48</sup> クララは、来日してから1年半以降の明治11年2月に大阪から保姆見習いとして東京師範学校に入学した学生である氏原銀に対し「主席保姆松野クララ先生は、日本語に熟せられず、私の名を呼ばれるに、尊称をつけて、お氏原さんと申された」という記述にあるように、日本語に相当苦勞していたことがよく言われている（倉橋惣三 1930 前掲書 p120）。
- <sup>49</sup> 前村晃 2015 豊田英雄と同時代の保育者たち 三恵社 p120
- <sup>50</sup> 南雲元女 1976 松野クララの人間的側面：研究ノート（その一）（人でつづる保育史） 幼児の教育 75(11) p35
- <sup>51</sup> 今野秀洋 2013 妊娠中の旅行について 2016年2月15日アクセス <http://www.sanolc.com/blog/2013/09/post-3-633787.html>
- <sup>52</sup> 当時、東京と群馬の交通機関は馬車、人力車、利根の水路を利用することであったと記されている（南雲元女 1976 前掲書 p36）
- <sup>53</sup> 倉橋惣三ら 1930 前掲書 p349
- <sup>54</sup> 倉橋惣三ら 1930 前掲書 p348
- <sup>55</sup> アネッテ・フォン・ハインツ（平野正久訳） 松野クララ顕彰碑除幕式へのメッセージ ごあいさつ 宮里暁美ら 2011 前掲書 p21-22
- <sup>56</sup> 松野礪の亡き後、個人の遺徳を偲び門下生らが東京大学演習林内にある外国樹種植栽地一体を「松野記念林」にし、その地域の一角に顕彰碑を建てた。その松野記念林の外国樹種の植栽を実現するために、クララは異常なまでの執念を燃やし、そのクララの真剣な取り組み方には林業関係の専門家も一様に胸を打たれた様で、賛辞を送ったことなどが挙げられている（南雲元女 1976 松野クララの人間的側面：研究ノート（その二）（人でつづる保育史） 幼児の教育 75 . 12 p16）
- <sup>57</sup> 鷗原晶子 1997 Margarethe Meyer Schurz の研究 2—M.M. シュルツと松野クララを比較して—日本保育学会研究論文集 50 p379
- <sup>58</sup> 氏原銀 女子高等師範学校付属幼稚園にツキテ 竹村一 1960 幼稚園教育と健康教育 ひかりのくに昭和出版株式会社 p137
- <sup>59</sup> 尚、ピアノやクララが引く曲が当時珍しかったからかこの活動を子どもも保姆らも楽しみにしていたことが記されている（倉橋惣三ら 1930 前掲書 p236）。

- <sup>60</sup> 前村晃ら 2010 前掲書 p75
- <sup>61</sup> 倉橋惣三ら 1930 前掲書 p350
- <sup>62</sup> 倉橋惣三ら 1930 前掲書 p350
- <sup>63</sup> クララ・ホイットニー(著),一又 民子(翻訳) 1976 クララの明治日記 下巻 講談社 p52
- <sup>64</sup> 倉橋惣三ら 1930 前掲書 p81
- <sup>65</sup> 前村晃 2011 豊田英雄と草創期の幼稚園教育に関する研究(8)：横川椋子と私立八王子幼稚園の開設事情及び同園の史的位置 佐賀大学文化教育学部研究論文集 15(2), p13
- <sup>66</sup> 倉橋惣三 1941 豊田英雄女史御慰安會に列して：併せて、貴重な幼稚園史資料の数々 日本幼稚園協會 幼児の教育 Vol. 41-2 p29
- <sup>67</sup> 倉橋惣三ら 1930 前掲書 p346
- <sup>68</sup> 前村晃ら 2010 前掲書 p126
- <sup>69</sup> 氏原銀 女子高等師範学校付属幼稚園にツキテ 竹村一 1960 前掲書 p134
- <sup>70</sup> 国吉栄 2005 前掲書 p379
- <sup>71</sup> 倉橋惣三 1941 前掲書 p29
- <sup>72</sup> 前村晃 2010 前掲書 p176
- <sup>73</sup> 日浦は、「寛容性」の涵養を現在の教育・保育の重要な課題として、人々の間にある「違い」による葛藤を乗り越え互いに尊重し合いながら、対話と参加によって新しい価値を創造する心性と態度であるとしている(日浦直美 2009 「寛容性」の涵養に関する幼児教育学的考察—可視的差異に対する幼児の反応と反偏見教育的アプローチの分析— 風間書房 p195)。